

中学生における学校生活スキルと学校生活満足度との関連

筑波大学心理学研究科 飯田 順子

本研究は中学生の学校生活スキルと学校生活満足度との関連を検討することを目的に、中学生240名を対象に調査を実施した。その結果、学校生活スキルは特定の方法で、学校生活満足度の承認得点および被害・不適応得点に影響を与えていることが示された。また、承認得点と被害・不適応得点を基に分類された4群で、学校生活スキルの特徴が異なることも示された。終わりに、4群に対する学校生活スキルに焦点を当てたスキルトレーニングの計画・実践における提言を述べている。

キーワード：学校生活スキル，学校生活満足度，中学生，二次的援助サービス，三次的援助サービス

I 問題と目的

不登校やいじめ、少年犯罪など中学生の問題傾向の増加が指摘されている。そのような背景から、学校心理学では、三段階の心理教育的援助サービスという考え方を提唱し、援助サービスの充実を目指している（石隈，1999）。三段階の心理教育的援助サービスとは、生徒が必要としている援助のレベルに応じて、援助サービスを提供するという考え方であり、一次的援助サービス、二次的援助サービス、三次的援助サービスからなる。一次的援助サービスとは、全ての生徒を対象に、一般の発達過程に起こりうる問題への対処能力の向上を援助する予防的・発達促進的援助サービスであり、二次的援助サービスとは、問題を抱え始めている生徒をスクリーニングし、その問題が重大化しないように早期発見・早期介入を目指す援助サービスであり、三次的援助サービスとは、不登校状態にある生徒や学習障害（LD）を持つ生徒など特別な援助を必要としている生徒を対象とし個別の教育計画（IEP: Individualized Education Plan）を立て援助チームを組み対応していくことである（石隈，1999）。増加する中学生の問題傾向を考えたとき、問題が発生してから対応と同時に、問題が起こる前にいかに援助サービスを提供していくかということが重要な課題となる。ここで一次的援助サービスが注目されるが、一次的援助サービスは問題が明らかになる事前の活動であり、

「何に焦点を当てて援助サービスを提供していくのか」という問いが生じる。

飯田・石隈（2002a）は、この問いに対して、中学生が一人の個人として成長していく中で出会う発達課題と学校生活を送る上で出会う教育課題の解決に求められるスキル（以下、学校生活スキル）に焦点を当てた研究を行っている。まず、飯田・石隈（2002a）は、学校心理学の援助領域の枠組み（石隈，1999）と、社会的スキル（庄司，1991）やライフスキル（Darden, Ginter, & Gazda, 1996; WHO, 1994）におけるスキルの基本的性質とされている認識を参考に、学校生活スキルを「学習される，学習面，社会面，進路面，健康面の領域で、中学生が抱える発達課題・教育課題の解決を促進する，学校適応において個人の目標達成に有効である，学校という場面で受容される，学校で教育できる行動」と定義している。そして、飯田・石隈（2002a）はこの定義にしたがい、その個人差を測定するための尺度「学校生活スキル尺度（中学生版）」を作成している。この尺度は、個人で行う学習のために用いられるスキルである「自己学習スキル（14項目）」、進路決定に必要な意志決定スキルや問題解決スキルに関するスキルである「進路決定スキル（12項目）」、集団活動の際必要とされるスキルである「集団活動スキル（12項目）」、健康維持に関わる自己統制に関するスキルと大人への相談に関するスキルからなる「健康維持スキル（9項目）」、同年代の友人や

異性とのコミュニケーションに関するスキルである「同輩とのコミュニケーションスキル(7項目)」の5つの下位尺度,計54項目から構成されている。

前述のように学校生活スキル尺度は、一次的援助サービスの対象として全ての生徒が獲得していることが望ましい行動を調査によって明らかにして作成された尺度である。しかし、学校には問題を抱え始めた生徒で二次的援助サービスを必要とする生徒や、不登校状態にある生徒や障害を持っている生徒など三次的援助サービスを必要とする生徒など様々な援助ニーズを持っている生徒がいる。そして、学校に来てはいるがなんとなく学級で居心地が悪く感じている生徒やクラスメートとの関係がうまくいかず不全感を抱えている生徒など、二次的援助サービスを必要としている生徒を早期発見・早期介入することが、問題が深刻化するのを予防する援助サービスとして重要である。そのような問題意識から、二次的援助サービス以上の援助サービスを必要とする生徒の発見を目指し作成された尺度に、河村(1999)の学校生活満足度尺度がある。学校生活満足度尺度は、生徒が学校生活において満足感や充実感を得られているかを問う「承認・満足因子」と、からかいや無視などの行為を受けているかや不応感を感じているかを問う「被侵害・不応因子」の2因子からなっている。河村(1999)はこの尺度を中学生5071名に実施し、各因子の平均点を基に生徒を4群に分類している。承認得点が平均値(33)よりも高く、被侵害・不応得点が平均値(22)より低い生徒を「学校生活満足群」、承認得点と被侵害・不応得点がともに平均値よりも高い生徒を「学校生活不満足群」としている。そして、非承認群と侵害行為認知群の生徒は、学校生活で積極的に活動し認められるという経験を持っていないことや、クラスメート等との対人関係において苦戦していることが考えられ、二次的援助サービスを必要とする生徒であると述べられている。そして、学校生活不満足群の生徒は、学校生活で積極的に活動し認められるという経験を持っていないと同時に、クラスメート等との対人関係において苦戦していることが考えられ、より多くの個別の援助サービスを必要としている可能性が考えられ、

三次的援助サービスを必要としていると述べられている(河村,1999)。

学校生活満足度尺度を実施することで、二次的援助サービスや三次的援助サービスを必要としている生徒を早期に発見できる可能性が高くなったと考えられるが、では二次的援助サービスや三次的援助サービスを必要としている生徒を発見した際にどのような援助が効果的となるのであろうか。二次的援助サービスや三次的援助サービスを必要とする生徒にどのような学校生活スキルの欠如がみられるかを明らかにすることで、二次的援助サービスや三次的援助サービスを必要とする生徒のスキルに焦点を当てた援助計画をたてることが可能になると考えられる。以上のことを踏まえ、本研究は以下の2つのことを目指す。第1の目的は、学校生活スキルが中学生の学校生活満足度に与える影響について検討することとする。第2の目的は、学校生活満足度の各群に所属する生徒の学校生活スキルの特徴を明らかにすることとする。

II 方法

1. 調査対象

関東圏内の2つの中学校に通う中学生計240名(男子128名,女子112名)を対象とした。

2. 調査時期

2001年12月上旬に実施した。

3. 手続き

担任教諭に教示文を渡し、質問紙をクラスごとに実施するよう依頼し、後日回収した。

4. 調査内容

以下の(1)(2)からなる質問紙を作成した。

1) 学校生活スキル尺度(中学生版)

前述の飯田・石隈(2002a)によって作成された尺度で、5つの下位尺度,計54項目からなる。「今のあなたの状況に関してどの程度あてはまると思いますか」の問いに対し、「1.まったくあてはまらない」「2.ややあてはまらない」「3.ややあてはまる」「4.とてもよくあてはまる」の4件法で回答を求めた。なお、飯田・石隈(2002a)では10の逆転項目が

含まれていたが、生徒の回答のしやすさを考慮し、全ての項目の回答を同一の方向で統一した。単純加算により各下位尺度の合計得点を算出した。得点が高いほど、その領域のスキルが高いことになる。

2) 学校生活満足度尺度 (中学生用)

前述の河村 (1999) によって作成された尺度で、「承認因子」「被侵害・不適応因子」の2つの因子、計20項目からなる。承認因子には、「私は勉強や運動、特技やひょうきんさなどで友人から認められていると思う」「私はクラスの中で存在感があると思う」といった10項目が含まれる。被侵害・不適応因子には、「私はクラスの人から無視されるようなことがある」「私はクラスや部活でからかわれたりバカにされるようなことがある」といった10項目が含まれる。そして各項目について、「今の自分の学校生活を振り返って、質問項目に対して自分の気持ちに近い数字に○をつけて下さい」という問いに対し、「1. 全くない」「2. あまりない」「3. どちらともいえない」「4. ときどきある」「5. よくある」の5件法で回答を求めた。単純加算により各因子の合計得点を算出した。

III 結 果

1. 諸尺度の検討

1) 学校生活スキル尺度 (中学生版)

学校生活スキル尺度 (中学生版) 54項目について、主成分分解・バリマックス回転による因子分析を実施した。その結果、いくつかの項目が飯田・石隈 (2002a) と異なる下位尺度に分類されたが、各下位尺度は基本的に飯田・石隈 (2002a) と同様の5つの下位尺度に分類された。飯田・石隈 (2002a) と概ね同様に分類されたこと、および今回は調査対象者数が少なかったことを考慮し、飯田・石隈 (2002a) の下位尺度の分類を採用することとした。各下位尺度の信頼性を検討したところ、 $\alpha = .768 \sim .884$ となりある程度の信頼性が確認された。各下位尺度の項目数 (I)、回答者数 (n)、平均値 (M)、標準偏差 (SD)、信頼性係数 (α) を表1に示す。

2) 学校生活満足度尺度 (中学生用)

学校生活満足度尺度 (中学生用) 20項目について、主成分分解・バリマックス回転による因子分析を実施した。その結果、河村 (1999) と同様の2因子「承認の

因子」「被侵害・不適応の因子」に分類された。承認の因子の信頼性係数は $\alpha = .899$ 、被侵害・不適応の因子の信頼性係数は $\alpha = .859$ であった。各下位尺度の項目数 (I)、回答者数 (n)、平均値 (M)、標準偏差 (SD)、信頼性係数 (α) を表1に示す。

表1 各尺度の記述統計と α 係数

	I	n	M	SD	α
学校生活スキル					
自己学習スキル	14	228	36.71	7.82	.884
進路決定スキル	12	235	31.82	5.44	.805
集団活動スキル	12	235	35.87	5.31	.796
健康維持スキル	9	232	24.51	4.65	.830
コミュニケーションスキル	7	240	20.61	3.92	.768
学校生活満足度					
承認得点	10	222	31.00	8.23	.899
被侵害・不適応得点	10	230	20.02	7.78	.859

2. 学校生活スキルと学校生活満足度の関連

学校生活スキルと学校生活満足度の関連を検討するため、学校生活スキルの5つの下位尺度と学校生活満足度の2つの因子の相関係数を算出した。その結果、全ての学校生活スキルと承認得点が中程度の相関関係を示した ($r = .423 \sim .597$, $p < .01$)。被侵害・不適応得点とは集団活動スキルが低い相関 ($r = -.189$, $p < .01$)、同輩とのコミュニケーションスキルが中程度の相関 ($r = -.332$, $p < .01$) を示した (表2)。

表2 学校生活スキルと学校生活満足度の関連

説明変数	承認		被侵害・不適応	
	r	β	r	β
学校生活スキル				
自己学習スキル	.423**	.056	-.125	-.018
進路決定スキル	.464**	.163*	-.059	.126
集団活動スキル	.424**	.059	-.189**	-.048
健康維持スキル	.428**	.100	-.130	.007
コミュニケーションスキル	.597**	.421**	-.332**	-.373**
$adjR^2$		.409**		.108**

* $p < .05$, ** $p < .01$

さらに、学校生活スキルの学校生活満足度への影響を検討するため、学校生活スキルの5つの下位尺度を

表3 各群の学校生活スキル得点の比較

	学校生活満足群 <i>n</i> = 73	非承認群 <i>n</i> = 58	侵害行為認知群 <i>n</i> = 25	学校生活不満足群 <i>n</i> = 63	<i>F</i>	多重比較
自己学習スキル	38.73	35.58	41.17	33.98	7.69**	満足 > 不満; 侵害 > 非承認, 不満
進路決定スキル	34.39	29.51	35.13	29.71	19.01**	満足, 侵害 > 非承認, 不満
集団活動スキル	37.85	34.93	37.88	33.71	9.49**	満足 > 非承認, 不満; 侵害 > 不満
健康維持スキル	25.87	23.39	26.29	23.33	5.82**	満足, 侵害 > 非承認, 不満
コミュニケーションスキル	23.58	19.48	21.44	18.11	34.19**	満足 > 非承認, 侵害, 不満; 侵害 > 不満

***p* < .01

説明変数、学校生活満足度の2つの因子を目的変数とし、重回帰分析を行った(表2)。2つの因子において、重回帰式は有意となった。学校生活スキルの承認因子への影響は $adjR^2 = .40$ [$F(5,193) = 28.425, p < .01$] となり、進路決定スキル ($\beta = .163, p < .05$) と同輩とのコミュニケーションスキル ($\beta = .421, p < .01$) が有意な影響を与えていた。学校生活スキルの被侵害・不適応因子への影響は $adjR^2 = .10$ [$F(5,201) = 6.001, p < .01$] となり、同輩とのコミュニケーションスキル ($\beta = -.373, p < .01$) が有意な影響を与えていた。

3. 学校生活満足度の各群にみられる学校生活スキルの特徴

河村(1999)が示す承認得点と被侵害・不適応得点の基準を用い、全生徒を4群に分類した。各群に所属する人数を表3に示す。各群による学校生活スキル得点の比較を行うため、学校生活満足度の得点によって分類された4つの群を独立変数とし、学校生活スキルの5つの下位尺度を従属変数とした一元配置分散分析を行った。その結果、学校生活スキルの5つの下位尺度全てにおいて、学校生活満足度の4群による有意な差がみられた($F = 5.82 \sim 34.19, p < .01$)。4群の間に有意差がみられたため、Tukey法を用い多重比較を行った。その結果、自己学習スキルは、学校生活満足群が学校生活不満足群より高く、侵害行為認知群が非承認群と学校生活不満足群より高かった。次に、進路決定スキルは、学校生活満足群と侵害行為認知群がいずれも非承認群および学校生活不満足群より高かった。集団活動スキルは、学校生活満足群が非承認群および学校生活不満足群より高く、侵害行為認知群が学校生活不満足群より高かった。健康維持スキルは、学校生活満足群と侵害行為認知群がいずれも非承認群および

学校生活不満足群より高かった。最後に、同輩とのコミュニケーションスキルは、学校生活満足群が非承認群、侵害行為認知群、学校生活不満足群のいずれの群よりも高く、また侵害行為認知群が学校生活不満足群より高かった。

次に、学校生活スキルの5つの下位尺度間の比較を行えるようにするため、学校生活スキル尺度の5つの下位尺度の得点を標準得点に換算した。そして、学校生活満足度によって分類された4群に所属する生徒の、学校生活スキルの5つの下位尺度の標準得点の平均値を算出した。各群の特徴を図1に示す。学校生活満足群は、学校生活スキルの5つのスキルがいずれも平均より高く、特に同輩とのコミュニケーションスキルが顕著に高い傾向を有している。非承認群は、5つのスキルがいずれも平均よりやや低い傾向を示している。侵害行為認知群は、5つのスキルがいずれも平均より高い傾向を示しているが、学校生活満足群と比較すると同輩とのコミュニケーションスキルが低いことがわ

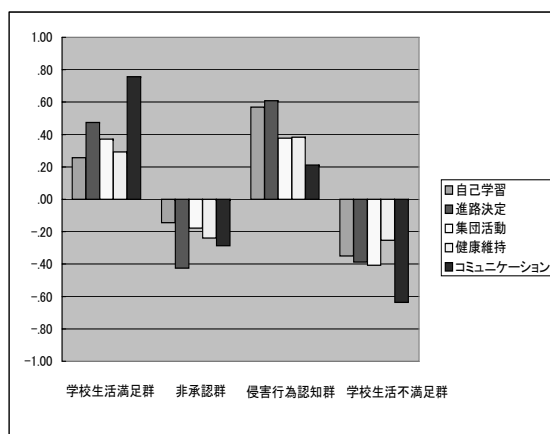


図1 各群の学校生活スキルの特徴

かる。学校生活不満足群は、5つのスキルがいずれも平均より低く、特に同輩とのコミュニケーションスキルが顕著に低い傾向が示された。

IV 考 察

1. 本研究のまとめ

本研究は、学校生活スキルと学校生活満足度の関連を検討することを目的に、中学生240名を対象に調査を実施し、2つの分析を行った。まず第1に、学校生活スキルと学校生活満足度の関連を検討するため、相関分析と重回帰分析を行った。5つの学校生活スキルはいずれも、生徒が自分の行動や存在をクラスメートや教師から認められていると感じているかどうかを示す承認得点と関連がみられた。一方、生徒が持っている不適応感やいじめ・ひやかしなどの有無を問う被侵害・不適応得点とは、集団活動スキルおよび同輩とのコミュニケーションスキルが関連していることが示された。学校生活スキルが承認得点に与える影響では、進路決定スキルと同輩とのコミュニケーションスキルの影響がみられた。この結果は、進路決定スキルが高いということは、情報収集や周りの大人の観察などを行い進路に対し積極的に取り組んでいることを意味しているが、自分の進む方向に向けて積極的に活動している生徒は、自分の強い面や得意なことを把握しており、それを学級でも認められていると感じていることを示唆している。同輩とのコミュニケーションスキルが高いということは、自分の気持ちを相手に伝えることや相手の話を上手に聴くことができていることを意味しているが、それにより互いに尊重しあう円滑な人間関係を築き学級に居場所を感じられていることを示唆している。学校生活スキルが被侵害・不適応得点に与える影響では、同輩とのコミュニケーションスキルの影響のみがみられた。同輩とのコミュニケーションスキルが低い人は、クラスメートにからかわれたり無視されるようなことがあった際に、自分の気持ちをうまく相手に伝えたり相手に話しかけ事態を改善することが苦手であることが考えられ、それが高い被侵害・不適応得点につながっていると考えられる。

第2に、学校生活満足度の承認得点および被侵害・不適応得点の平均値を基に生徒を4群に分類し、各群の学校生活スキルの差を分析した。そして、各群の学

校生活スキルの標準得点を基に各群の学校生活スキルの特徴を図に示した。その結果、学校生活満足群は全ての学校生活スキルが非承認群と学校生活不満足群より有意に高かった。また、侵害行為認知群も同輩とのコミュニケーションスキルを除く4つの学校生活スキルで非承認群や学校生活不満足群より高かった。この結果から、学校生活満足群と侵害行為認知群は共通点が多く、この2つの群を分けている要素は同輩とのコミュニケーションスキルであることが示唆された。

2. 各群に所属する生徒の学校生活スキルの特徴と心理教育的援助サービス

学校生活満足度の得点によって分類された4群に所属する生徒の学校生活スキルの特徴と、各群に所属する生徒への心理教育的援助サービスの計画・実践に関する提言を述べる。まず、学校生活満足群について述べる。この群は、5つの学校生活スキルがいずれも平均点を上回っており、特に承認得点と被侵害・不適応得点に影響を与えることが示された同輩とのコミュニケーションスキルが顕著に高い傾向が示された。このことから、この群は高い学校生活スキルを活用し学校生活において積極的に活動に参加し学校生活を楽しまれていることがわかる。ただし、進路決定など中学校で初めて経験する大きな課題への取り組みは、この群に所属する生徒もやはり困難を抱えることが予測される。そのような課題への取り組みに必要な自助資源を増やす働きかけをしたり、課題への取り組みの困難が大きくなりすぎないように必要に応じて情報提供やアドバイス等をしていくことが、この群の生徒の援助サービスの中心となると考える。学校生活スキルに焦点を当てたスキルトレーニングの実施に際しても、この群に所属する生徒は既にある程度のスキルを獲得・遂行できていると考えられるため、彼らのスキルが年齢や学年に応じて必要なスキルが順調にのびていくように、一次的援助サービスの範囲で実施していけばよいだろう。

次に侵害行為認知群の特徴とこの群に所属する生徒への心理教育的援助サービスについて述べる。この群は、自己学習スキルや進路決定スキルが高く、自分でこつこつ行う学習や自分の進路について考えることを積極的に行っている生徒であると考えられる。高い自己学習スキルや進路決定スキルと比べると、同輩との

コミュニケーションスキルがやや低く、被侵害・不適応因子の項目が問うようなクラスメートからのいじめ・ひやかしなどがあった場合に、コミュニケーションスキルを活用し友だちに対し自己主張することが他の学校生活スキルと比較して得意ではないことが考えられる。同輩とのコミュニケーションスキルを高めるには、飯田・石隈（2001）で紹介されている相手の話の聴き方・自分の気持ちの伝え方を含むコミュニケーションスキルに焦点を当てたスキルトレーニングや、藤枝・相川（2001）や石川・小林（1998）によって紹介されている社会的スキル訓練などがある。そのようなプラスアルファのサポートが必要な群という点で、河村（1999）が述べているようにこの群は二次的援助サービスの対象の群であると考えられる。

非承認群は学級の中で自分は認められていないと感じている群である。彼らの学校生活スキルをみると、5つの学校生活スキルがいずれも平均を下回っており、学校生活スキルの獲得・遂行が低いことから学校生活において積極的に活動に参加できていないことが考えられる。また、そのことが、学級において自分が認められているという感覚を持っていないことにつながっていることが考えられる。この群に所属する生徒のサポートでは、特定の学校生活スキルに働きかけ得意なことや興味・関心のあることを高め、学級の中で認められる経験を持てるようにすることが承認を高めるには有効であると思われる。得意なことや興味・関心のあることを高めるサポートは、自分の将来について考えることにもつながり、彼らの低い進路決定スキルを高めることにもつながると考えられる。

最後に、学校生活不満足群に所属する生徒は、全ての学校生活スキルが有意に学校生活満足群や侵害行為認知群より低いことが示され、学校生活スキルの獲得において苦戦していることがわかる。学校生活不満足群と非承認群の相違点は学校生活満足群と侵害行為認知群の相違点と同様に、同輩とのコミュニケーションスキルの差である。同輩とのコミュニケーションスキルは、自己効力感や学業成績（飯田・石隈，2002b）にも多大な影響を与えていることが確認されており、中学生の学習面や自分とのつきあいにおいて非常に重要な役割を果たしている。学校生活不満足群に所属する生徒は、前述のコミュニケーションスキルを高めるサポートに加え、学習面、進路面、社会面、健康面と

幅広く苦戦していることが考えられるため、個別の学校生活スキルのプロフィールを作成し、強いスキルを生かしながら低いスキルを高めるような個別プログラムを組み援助サービスを提供していくことが考えられる。学校生活スキルの面からも、この群は河村（1999）が述べるように三次的な援助サービスを必要としていると考えられる。

3. 本研究の限界と今後の課題

本研究の限界と今後の課題を2点述べる。第1に、学校生活スキルの被侵害・不適応得点への影響を表す $adjR^2$ が.108と低かった点である。本研究は学校生活スキルと学校生活満足度の関連を検討することを目的としていたため、説明変数に学校生活スキルのみを用いている。ただし、学校生活満足度を高めるための効果的な心理教育的援助サービスの計画・実践を考える際には、学校生活満足度と関連することが予測されるその他の要因〔例：学級の雰囲気やソーシャルサポート（岡安・嶋田・坂野，1993）〕も含めたモデルを作成し検討する必要がある。第2に、本研究では学校生活スキルと学校生活満足度ともに、自己評定尺度で測定している点で課題が残る。本研究で学校生活不満足群に分類された生徒は、三次的援助サービスを必要としていると分類されるが、実際の不登校状態にある生徒ではなく、いずれも学校に登校し調査に回答している生徒である。三次的援助サービスの必要な生徒の学校生活スキルを検討する上では、生徒の援助ニーズを把握する指標として、学校の遅刻・欠席状況や休日の時間の過ごし方などの行動指標を用いて同様の結果が得られるか再度検討する必要がある。また、学校生活スキルも自己評定を用いているが、スキルの自己評定は信頼性にかけることをGresham（1986）が指摘している。スキルに関しても教師評定など他者評定を使用するなどして、再度同様の結果が得られるか検討する必要がある。これらは今後の課題としたい。

引用文献

- Darden, C.A., Ginter, E.J., & Gazda, G.M. 1996 Life-Skills Development Scale-Adolescent Form: The theoretical and therapeutic relevance of life-skills. *Journal of Mental Health Counseling*, 18,

- 142-163.
- 藤枝静暁・相川充 2001 小学校における学級単位の社会的スキル訓練の効果に関する実験的検討 教育心理学研究, 49, 371 - 381 .
- Gresham, F.M. 1986 Conceptual issues in the assessment of social competence in children. In P.S. Strain, M.J. Guralnick, & H.M. Walker (Eds.), *Children's social behavior: Development, assessment, and modification*. New York: Academic Press. Pp.143-179.
- 飯田順子・石隈利紀 2001 中学校における学級集団を対象としたスキルトレーニング - 自己効力感がスキル学習に与える影響 筑波大学心理学研究, 23, 179 - 185 .
- 飯田順子・石隈利紀 2002a 中学生の学校生活スキルに関する研究—学校生活スキル尺度(中学生版)の開発 教育心理学研究, 50, 225 - 236 .
- 飯田順子・石隈利紀 2002b 中学生の学校生活スキルと学校における活動状況との関連—自己効力感と学業成績に焦点を当てて 教育相談研究, 40, 13 - 24 .
- 石川芳子・小林正幸 1998 小学校における社会的スキル訓練の適用について - 小集団による適用効果の検討 カウンセリング研究, 31, 300 - 309 .
- 石隈利紀 1999 学校心理学—教師・スクールカウンセラー・保護者のチームによる心理教育的援助サービス 誠信書房
- 河村茂雄 1999 生徒の援助ニーズを把握するための尺度の開発(1) - 学校生活満足度尺度(中学生用)の作成 カウンセリング研究, 32, 274 - 282 .
- 岡安孝弘・嶋田洋徳・坂野雄二 1993 中学生におけるソーシャル・サポートの学校ストレス軽減効果 教育心理学研究, 41, 302 - 312 .
- 庄司一子 1991 社会的スキルの尺度の検討 - 信頼性・妥当性について 教育相談研究, 29, 18 - 25 .
- WHO 川畑徹朗(監訳) 1994 ライフスキル教育 大修館書店
- (World Health Organization: Division of Mental Health 1993 *Life skills education in schools*. Ann Arbor, MI: University Microfilms International.)
- School-life Skills and Satisfaction with School Life of Junior High School Students
- Junko IIDA
- A questionnaire was administered to 240 junior high school students to examine the relationship between school life skills and satisfaction with school life. The results showed that school life skills affected satisfaction with school life. Based on the score of the Satisfaction with School Life Scale, students were classified into four groups, each showing distinct characteristics in their school life skills. The implications for planning and conducting skill training focusing on school life skills for the four groups were discussed.
- Key words: school-life skills, satisfaction with school life, junior high school students, secondary support services, tertiary support services
- (2003年1月18日受稿; 2003年5月31日受理)